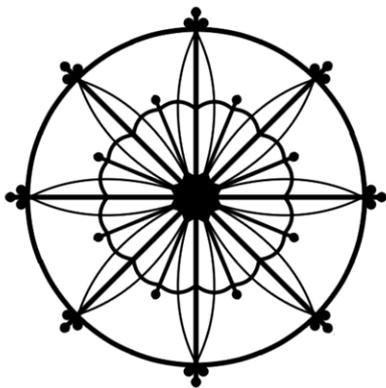




ひぐらしのなごみ
頃に業卒
アナザーエピソード
電撃大07 / 07th Expansion
イラスト 夏海タイ

ひぐらしのなごみ
頃に業卒
アナザーエピソード
電撃大07 / 07th Expansion
イラスト 夏海タイ



ひぐらしのなく頃に業卒
アナザーエンド

竜騎士07
イラスト / 夏海ケイ



【沙都子】「……ここ、……は……」

体が重い。……肩が突っ張るこの感じ……。

慌てて、手の平を見る。

大きな手。長い指……。

【沙都子】「私、……これは……、」

これは私の体じゃない。北条沙都子の体じゃない。

いや、違う。

北条沙都子なんだけれども、雛見沢で過ごしていた頃の、小学生の北条沙都子の体ではないのだ。

【沙都子】「……これ、高校生の体……?! じゃあここ、どこ……?! まさか……、」

薄暗さに目が慣れ、ようやくここがどこかわかってくる。

狭い部屋。まるで牢屋。

そう。ここは自習室。

通称、牢獄とも呼ばれる……、聖ルチア学園の悪名高い隔離室だ。

何の飾り気もない、冷え切ったコンクリートの壁。

わざと居心地を悪くさせるのが目的としか思えない硬くて冷え切ったベッド。

なのに、学習机だけは大きくて立派なものが運び込まれているのだ。

机の上には、教材やら問題集やらがぞんざいに積み上げられている。

自習室。

ここは自分のルチアにおける人生を、選択させられる最後の場なのだ。

唯一の出口である鉄扉は、牢屋のそれを思わせるが、鍵は掛かっていない。

しかし、それを開ける時は、自主退学を受け容れたことになる。

この学校を去るのが嫌ならば、それに背を向け、学習机に向かえということだ……。

自分が唐突に高校生になっていて、それもルチアの牢獄にいることへの違和感は次第に薄れる。

私は私。……北条沙都子。

梨花と一緒に聖ルチア学園に行こうと誘われ、……いえ、付き合わせられ、いとも簡単に捨てられただけの馬鹿な子……。

【沙都子】「……梨花……、梨花あ……ッ、……ッッ」

頭の中が、目頭が、梨花への怒りと恨みで真っ赤に焼けていくのがわかる。悔しくて悔しくて、両拳が戦慄く。ぼろぼろと焼けた鉄のような涙が零れ落ちる。

【沙都子】「……ただ……ひとりで勉強するのがつまらないからってだけで……、私を……引き込んで……ッ」

それで、入学できたなら……、もういらなからって、……いらなからって……、こんな仕打ち……ッ。

【沙都子】「梨花の田舎臭かった昔を知っている私など、……このお洒落な学園ではさぞや邪魔でしょうよ……」

私がいなくなれば……、さぞや清々するでしょうよ……。

……そう思うと、最後の最後まで思い通りになつて堪るかという、お腹の底がチリチリと灼熱するかのような感覚を覚える。

こんな部屋に閉じ込めてまで勉強をさせようとする学園への怒りよりも、私を裏切った梨花への怒りが、勝る。

怒りの炎が、私の心の他の全ての雑多な感情を焼き尽くして、全てを呑み込む。

燃やし尽くした後には、真っ白な灰と、それでもなお燃え尽きることのない梨花への怒りだけが残る。

それは純粹な……、怒り。

そして、復讐……。

【沙都子】「……梨花……。あなたの思い通りになんか、なってあげませんですことよ……。絶対に……」

梨花への怒りによって、学園の理不尽な仕打ちへの怒りはすでに消え去っている。

あの鉄扉を開ければ、私は雛見沢へ帰れる。そして梨花は、邪魔者の私がいなくなった後の学園生活を謳歌するのだ。

させて堪るか……。

梨花の思い通りになる鉄扉には背を向けて、……学習机に向かう。

この部屋から解放される為のものは、全て机の上に積み重ねられているのだ。

見るのも触れるのも嫌だったはずの教材や問題集。

だが、今はどうでもいい。梨花に復讐する為にも、ここから出る為に、こいつらを片付けなければならぬのだ。

片付ける。食う。食い尽くすッ。

怒りに見開いた瞳。目の奥が開いていくこの感覚は、懐かしくもあり、自分を取り戻していくようでもある。

【沙都子】「……馬鹿にしているんですの？ この、下らない問題集は。ここは天下の聖ルチーア学園でございませう？ 仮にもその校門を堂々と潜ってきたのに、解けない訳がありませんんでしょ……」



皮肉だ。梨花と共に、暑い日も寒い日も打ち込んできた勉強が、今、梨花への恨みを晴らす為に牢獄から出る鍵となる……! !

【沙都子】「下らない。馬鹿にしてる。何ですの、これ。……聖ルチアに、一度ならず何度も合格できたこの私に、こんな下らない問題集を……?」

かつては、強いられる勉強に対し、激しい嫌悪感があった。

だから、そこに記されているものはただの汚らわしいものであって、文章としてすら脳には入らなかった。

しかし、その嫌悪感を梨花への怒りが焼き尽くしてくれた今、……そこに浮かび上がった数々の問題は……、呆れるほどに簡単だつ。

その日の夕方。

食事を運んできた先生サマは、全て終わったと言つてのけた私が積み上げた問題集が、本当に全て終えられていることを確認しながら呆然としていた……。

私はベッドに横になって足を組みながら悠然と言う。

【沙都子】「この程度じゃ、腹の足しにもなりませんでしょ? もっとマシなヤツを山積みして欲しいですわね」

【先生】「……北条さん……。これだけの勉強が出来ながら、どうして……」

その表情に浮かぶのは、驚き。そして、ここにブチ込まれる前の北条沙都子とは、今の私が別人だということへの困惑だった。

【沙都子】「私、どうして横になって足を組むなんてお行儀の悪いことをしているかわかりませんか?」

【先生】「え? ……どういことですか……?」

【沙都子】「ここ、自習室でしょう? 気に入りましたの。ここ。……ここは鼻持ちならない連中もいないし、ふわふわした車酔いしそうな甘い匂いもしない。ただただ暗くて静かで、……十分な学力を取り戻すには最高の環境ですよ」

ここで私が行儀よくしていたら、ただちに釈放となつてしまつただろう。

それでは困るのだ。並の学力を取り戻した程度で釈放では、まだまだ力が足りないのだ。

聖ルチア学園は学力より気品が重んじられることになっているが、それはお嬢様クラスの連中の話だ。

一般入学の私たちは、まず優れた学力があつて、気品はその後となるのだ。

学力は、ここでは力となる。

力を得た者は、全てが肯定される。

そこからだ。梨花への恨みを晴らすのは……！

私の要望通り、次の日の朝、よりステップアップした学習教材が山盛りで届けられた。

私は容赦なく食い尽くす。

一間ずつ一間ずつ、梨花の息の根を止めるつもりで答えを書き潰していくのだ。

そして、次の朝……。

【先生】「おはようございます、北条さん。朝食の……、……え？」

【沙都子】「あら、まだこんばんはの時間だと思っていましたわ。ちょうど、お腹が空いてきたところだったんですの」

先生はその違和感の意味に気付き、仰天する。

沙都子は一睡もせず、それどころか眠気さえ感じさせずに、徹夜で問題集を片付けていたのだ。

いや、片付けていた、ではない。

片付け終わった、のだ。

【先生】「そ、その量を、一晩で……?! い、一睡もせず……?!」

【沙都子】「ねえ、先生。もう少し、私が眠くなれるようなレベルのものを用意して下さいませんか？」

【先生】「こ、これだけが出来れば十分ではありませんか……。今の北条さんならもう、教室での授業にも付いて行けるでしょう……!」

【沙都子】「センセ? ……私、教室での授業に付いて行きたいんじゃないんですの。教室での授業が、楽勝になるようなレベルに至りたいんですのよ」

確かに、今の沙都子ならば教室に戻り、他の生徒と同様に授業を受けることが出来るだろう。

しかしそれでは、最底辺がようやく並に並に戻った程度でしかない。

人は圧倒的な力と、その衝撃によって畏怖するのだ。

【沙都子】「この程度の学力では、私、まだまだ怖くて教室には戻れませんの。お願いですわ、先生。もっともっと、しっかりとここで、自分を見つめながら勉強したいんですの。ですから、もっともっと、私にお勉強を教えては下さりませんか……?」

【先生】「しゅ、主任の先生に相談してみますね……」

過去にも少なくない人数の生徒たちが、牢獄送りになった。

半分は退学を選び、半分は渋々と相応の時間をかけてある程度の勉強をこなし、半地下の補習クラスに戻っていく。

しかし、……こんな例は前代未聞だ。

まさに、覚醒とでもいうべき劇的变化。

まったく勉強に対しやる気を見せず、不貞腐れていたはずの生徒が、突然、やる気を発揮したどころか、ここは性に合うから引き続きもっと勉強がしたいと言いつつ……!

その日の夕方には、担任を伴い学年主任が訪れ、沙都子の心変わりについて聞いた。

【沙都子】「……あまりにもクラスメートの皆さんがお勉強が出来るもので、それがショックで、嫌になってしまっていたんですの」

もちろん、十分な学力を蓄えるまでここに留まる為の方便だ。

相手の心理を読み切り、自分の狙い通りのところに落とし込む。……トラップ使いの沙都子にとって、こんなのは初歩の初歩だ。

担任は、その心情はよく理解できる、そしてそれをよく打ち明けてくれたと感涙を浮かべてくれた。

【沙都子】「ここでしっかりと勉強をして、私はしっかりとやれるという自信を持って初めて、私は聖ルチアアの教えを本当の意味で学べると思っていますの。その為には、学力の低さによる僻みを、私はここで払拭しなければ教室に戻ることは出来ませんの」

万事は全て、沙都子の思い通りに動いた。

翌朝の朝食時に再び、担任が訪れ、そのやる気に免じて特別な計らいが許されたと伝えてくれた。

…北条沙都子が勉強を嫌いなのは、それに意味や目的が見出せないからだ。こんなものが将来、本当に役に立つんですの？ その質問に、大人たちはいつもぼんやりとした返事しか出来なかった。

だから、沙都子にとって勉強は、ただの時間の無駄だったのだ。

しかし、意味や目的があれば話は違う。

唯一無二の親友の梨花と同じ学校に進学するという目的があった際には、見事に合格に至るまでの勉強を堪え切っている。

そして、今は再び、勉強に、学力の向上に目的がある。

唯一無二の親友なのに、…自分を裏切った梨花に、復讐をする為に。

復讐。それこそが、私の願い…。

【沙都子】「願いを成就し…、運命を紡ぐ力。紡がれる糸の強さは、意志の強さ。気高く強き願いは、必ず現実となる」

それは小さな胸に宿る、大きな決意。

人の命が、もしも地球より重いなら。私の小さな決意は、地球よりも重い。

梨花…。私を裏切ったあなたへの復讐は、この星の全てよりも重い…ッ!!

それから、数週間が経った。

牢獄に墮ちた者は自分の運命を決めるのに短くない時間を掛けることがあるが、それでも数週間を経ることはない。

この頃には、沙都子の存在などクラスメートからは忘れ去られていた。

梨花だけは沙都子のことを心配し続けていたが、先生にいくら聞いても、自習室で勉強に集中したいそうです、以上のことを教えてはくれなかった。

だが、梨花とて、その心配な気持ちをひと月以上も持ち続けることは出来ない。

少なくとも退学になっていない以上、いつかきつと戻ってくると信じ、日々の学園生活をこれまで通りに続けるしかなかった。

そして、ある朝。

どうとうクラスメートは、1つだけぼかんと空いた席の主が再び帰ってきたことを知るのだ。

クラスメートたちは遠巻きに沙都子の様子をうかがいながら、ひそひそ話をしている。

普通、牢獄に墮ちた者は補習クラスに戻ってくるのがせいぜいで、一般クラスに戻ってくることはありえない。

しかし、戻ってきたのだ。補習クラスを飛び越えて、再び。

ここは一般クラス。いわゆるお嬢様クラスとは異なり、高い学力が求められる。そこに、帰ってきたのだ。

クラスメートたちは、何らかのコネクションやイレギュラー、あるいはトラブルを囁き合うが、当人にそれを聞ける勇気のある者はいない。

ひとりを除いて。

【梨花】「沙都子……。よかった。帰ってくるのをずっと待っていたのです」

【沙都子】「……………あら、梨花。お久しぶりでございますわね」

沙都子の冷めた表情を、梨花は、長い自習室籠りで疲れたのだらうと受け取った。

沙都子とは機嫌の良い日も悪い日も共に過ごしたのだ。……それも百年も。

だから不機嫌そうに見えても、それは少し疲れているだけで気に留めるほどのものではないと思った。……思ってしまった。

【梨花】「良かったら、放課後に一緒にお茶でもどうかしら。二人きりで」

【沙都子】「……………せっかくのお誘いですが、お断りいたしますわ。梨花を独り占めすると、妬む子も多いみたいですので」

【梨花】「……………沙都子……………」

案の定、梨花の取り巻きが怪訝な顔で見つめていた。

自分たちの神聖なアイドルが、素行不良の穢れに近付いて欲しくないのだから。

梨花が彼女たちのところへ戻ると、取り巻きたちがこそこそと囁く。

大方、あんな方と話しては穢れが移りますわ、とでも言っているのか。

そして梨花は、私の顔を立てるようなことを言っ、それに取り巻きは慈愛深さに感銘を受ける。

私を刺身のつまにして、悦に浸っているに違いないのだ。

奪い去ってやる。

あなたにとって居心地のいい聖ルチアを、奪い去ってやる。

あなたが私にとっての居心地のいい雛見沢の日々を奪い去ったように。

【沙都子】「……そこ。間違っていますよ」

ある日の教室にて。

突然、沙都子に答案の間違いを指摘された女生徒は、素行不良と知られてクラスでも孤立しているあの北条沙都子に話し掛けられると思わず、絶句してしまう。

それは、生徒たちにプリント問題が与えられ、出来た者から教壇に提出して退出していい、というものだった。

【沙都子】「ケアレスミスですわね。せっかくの頑張りが、勿体ないですわよ」

【女生徒】「あ、……ありがとう……ごさいます……」

北条沙都子は素行不良だけでなく、成績も最底辺、いやそれどころか、反抗して答案を白紙で出すような生徒だったはず。

それが、教壇へ向かう途中に、ちょっと覗き込んだだけで不正解を見抜き、それどころか

忠告までしてくれたのだ。

【沙都子】「苦手を克服する為に、いつも頑張ってるのは知ってますわよ。それがこんな小さいミスで台無しなんて惜しいでございますのことよ？」

【女生徒】「あ、…………ど、どうも…………」

クラスメートの全てが楽々と授業に付いて行ける訳ではない。

下のクラスに落ちることがないように、懸命に努力している者だっているのだ。

しかし、世の中は冷たい。

飛び抜けた評価を得るに至った努力には称賛を惜しまないが、辛うじて標準レベルを維持しようとする努力は、誰も評価してくれないのだ。

……それを、北条沙都子は見ている、評価してくれた……。

女生徒の友人が、どうしたの？ 何か嫌なことでも言われたの？ と怪訝そうな顔で尋ねてくる。

沙都子は相変わらずの、優雅さとは対極の様子で教室を出て行くところだった。

【女生徒】「……北条……さんって、……そんな悪い人じゃ、……ないと思う……」

大勢の生徒が集まる学校のような環境は、ヒエラルキーが生じ、生徒間に序列を生じさせる。それは人の性だ。

その序列にあぐらをかき、下位者の尊厳を傷付けて優越感に浸ろうとする輩は、ルチアにもいる。

他者の短所を目ざとく見つけ、それを指導すると称して、陰湿にいじめるのだ……。

ひとりの女生徒が、放課後のひと気のない廊下で、数人の意地悪な女生徒に寄ってたかっ
ていじめられていた……。

【沙都子】「……あらあら。クラスメイトにマナー指導なんて、熱心な方々ですわねえ？」

ルチアの生徒たちはトラブルを嫌い、見て見ぬふりをして避けることが多い。

このいじめも、何人かの生徒が目撃してははずだ。しかし、誰も止めようとはしなかつた。

沙都子を除いて。

【沙都子】「マナーなくしてエレガントもありませんけれど、マナーのご指導も、そこまでネチネチなさっているエレガントさの欠片もございませんでしてよ？」

【いじめっこ達】「……ほ、北条……。アンタには関係ないでしょ！」

【沙都子】「なくはありませんわあ？ だって私。粗野でエレガントさの欠片もないって、貴女達はよく陰口を仰っていたではありませんの。マナーのご指導を、私もぜひ、貴女達にしていたできたいですわね？」

沙都子の静かな気迫に、いじめっこ達は気圧されずにはいられない。

当然だ。魅音の部活でいくつもの死線を潜り、のみならず、山狗相手との戦いまでも繰り返して鍛えられた沙都子と、温室栽培のカボチャ風情では格が違い過ぎる。

沙都子が一步を詰めれば、彼女らは一步を後退る。

そして沙都子が、さらに大きく一步を踏み込んだ時、彼女らは何かに躓き、将棋倒しになつて倒れる。

そこにはどういふ訳かななぜかひよっこりと、絵の具で濁つた水でいっぱいにした筆洗いはケツが置かれているのだ。

【沙都子】「をーっほっほっほ！ あらあら、お召し物が大変ですわねえ？ 急いで洗いませんと、シミになってしまいましてよ？」

【いじめっこ達】「……北条、アンタ……、覚えてなさいよッ……！」

【沙都子】「それ、お喧嘩をお売りあそばしちやってるのかしら？ よろしくってよ？ 争い事は野蠻で喧嘩両成敗ですものねえ？ 私は補習クラスだろうと反省奉仕活動だろうと、それこそ牢獄送りだろうと構いませんことよ？ 一度落ちた身ですもの、二度だろうと三度だろうと構ったことじゃねえですわ。でも、貴女方はどうかしら？ くすくす、牢獄送りになつたなんて、親御さんたちに知られたら、恥ずかしくって里帰りも出来なくなりますわねえ……？」

いいタイミングで先生が通りがかる。

いじめっこ達は、ご機嫌ようとり繕うように挨拶し、すぐごと足早に逃げ去っていく。後には沙都子と、いじめられていた女生徒が残る。

沙都子に、助けてやったと恩を押し売りするつもりはない。だからとつと踵を返す。

温室野菜は、雑草育ちに助けられても、感謝よりも恐れの方が強いらろうから。

【女生徒】「あ、……あのっ、……北条さん……、ありがとうございました……ッ」

それは彼女にとつて、ありつたけの勇気だろう。沙都子の背中に、深々と頭を下げる。

【沙都子】「勘違いしてはいけませんわ？ すごいのは私じゃない。貴女でしてよ？」

【女生徒】「え……、私が……？」

【沙都子】「誰の助けもない中、あれだけの人数に寄つてたかつて詰られて。でも、あなたは感情を露わにすることもなく、静かに頭を垂れていたわ。百合の花みたいに凛としていますよ。……あなたはマナーをひとつ間違えたかもしれないけど、エレガントさは誰にも劣ることなんてありませんでしてよ」

女生徒は絶句して目に涙を浮かべてしまう。潤んだ瞳は沙都子の背中をじっと見つめていた……。

【女生徒】「ほ、北条さんのこと、ずっと誤解してましたッ。お、お慕い申し上げます……ッ！」

【担任】「それでは、先日のテストの答案をお返しします。難しいテストだったと思いますが、よもや満点の生徒が二人も出るとは思いませんでした。ひとりとは古手梨花さん」

さすが梨花さま……。梨花に心酔するクラスメートたちは、ほうつと感嘆の溜息を漏らす。

【担任】「もうひとりとは、北条沙都子さん」

クラス中が、時間が止まったかのように絶句し、その後、ヒソヒソと囁き合う声があちこちから聞こえた。

そんなことがある訳がない、きっとカンニング……。ヒソヒソ……。

その時、生徒の誰かが甲高い声で言った。

【クラスメート】「沙都子さんは、カンニングなんかしませんっ！」

それにはクラス中が、今度こそどよめいた。

牢獄帰りの不良、北条沙都子はクラスの腫物。触れないまでも、肩を持つことなどありえないはずだった。

しかし、他のクラスメートも声を上げる。

【クラスメート】「沙都子さんは立派な方ですわ！ 妬むような悪口は、私、聞き捨てがなりません！」

それには梨花も、その取り巻きたちも面食らう。

クラスにはいつの間にか、沙都子に心酔する派閥が生まれていたのだ。

梨花の取り巻きたちにとって、ヒエラルキーの絶対頂点を脅かす存在が生まれたことは、驚嘆すべきことであり、同時に許すことの出来ないものであった。

沙都子を支持する生徒の数人が、満点を拍手で讃える。

一方で、梨花を支持し、沙都子を目の敵にする取り巻きたちは、怪訝そうに見つめていた。

【梨花】「……沙都子……」

梨花は言葉を失っていた。

当然だ。沙都子が密かに、自身のシンパを増やしていたことなど知らなかったのだから。だが、親友を認めてくれるクラスメートが現れたことについては、心の中で喝采したいくらいに嬉しく感じていた。

その気持ちを、満面の笑みにして親友に送るのだ。

……くすくす。

梨花。あなたは今、私にもお友達が出来てよかったわねって、上から目線でそう思っているんでしょうね。

そうでしょうよ。だって、入学できたならもう用済みだけれど、ひとりぼっちで孤立してるのは、何だか気まずいでものねえ？

その用済みにもお友達が出来て、ようやく安心して無視できると、そう思って安堵しているんですよ。

……梨花。

これは全て、貴女への復讐の序章なんですよ……。

貴女が私から、居心地のいい雛見沢を奪い去ったように。

私も貴女から、居心地のいいルチアを奪い去ってやりますわ……。

朝。生徒たちが寮から校舎に通ってくる。
あちこちで挨拶を交わす声が聞こえる。
そんな中、取り巻きを引き連れて歩く生徒の姿が見える。
そしてそれは、梨花ではない。

【女生徒たち】「……沙都子さまだわっ。……沙都子さまっ、ご機嫌よう……!」

【沙都子】「ご機嫌よう。でも、親しい仲間だから、教室の外では気さくでよろしいんですよ? おはよ、みんな」

【女生徒たち】「お、おはようございますっ、沙都子さまっ」

【女生徒たち】「……今日も威風堂々、素敵でいらっしやるわ……」

【女生徒たち】「華奢で控えめであることばかりが花ではない。凛として毅然とした美しい花もあることを、沙都子さまはお示しになってるんだわ……」

【女生徒たち】「沙都子さまが、補習クラスや自習室に送られたことがあるなんて、今ではとても信じられませんか……」

【女生徒たち】「噂ですけれど。沙都子さまは元からお勉強の出来る方だったんだそうですわ。でも、ルチーアの私たちがなよよしている様を見て幻滅されたのとか……」

人は、努力の過程を知っている人間が辿り着いたものについては、神格化はしない。

沙都子が牢獄から帰ってから、少しずつ少しずつ這い上がったなら、ただの努力家止まり。

努力などしていかないはずの人間が、見違えるように化した時に、神格化するのだ。

沙都子はそれを狙い、牢獄で密かに、そして圧倒的な学力を身に付けたのだ。

想像を絶する執念と怨念で。

この頃には、梨花も沙都子の不穏な気配や挑発的な眼差しに気付き始めていた……。

【女生徒たち】「梨花さまだわっ。ご機嫌よう、梨花さまっ」

【梨花】「ご機嫌麗しゅう。今朝も柔らかな日差しが心地いいわね」

今度は、梨花が取り巻きを引き連れてやってくる。

まだ、沙都子とその取り巻きたちはそこにいた。

【女生徒たち】「やっぱり梨花さまですわ……。まるで、山の峰に咲く儂い一輪の花のよう……」

【女生徒たち】「私は沙都子さまだわ……。花だけれども、決して折れることのない強さが、まさに高潔だわ……」

【女生徒たち】「北条さんなんて、牢獄帰りの不良じゃない。お行儀も悪いですし」
 【女生徒たち】「はあ？ 今、何と仰いますか？ 彼の誰の悪口であっても聞かなかったふりは致しませんが、沙都子お姉さまの悪口とあっては、私、聞き捨てなりませんですよ」
 【女生徒たち】「あら嫌だ。やっぱり素行不良の北条さんに共感なさる方々は、本当に品がありませんこと」

【女生徒たち】「ないのは品じゃなくて胸じゃありませんこと？」

【女生徒たち】「んまーッ!! お下品な胸をハレンチにゆっさゆっさしてるウシ乳軍団の分際でッ！」

【梨花】「……やめてちょうだい。みんな、下がって。私は沙都子と話したいの」

【沙都子】「皆さん、お下がりがあそばせ。梨花が私に話があるようですので……」

双方の取り巻きたちは引き下がり、互いを無言で威嚇し合っている。
 歩み出た梨花と沙都子は、本当に久しぶりに、二人きりで対峙する。

【梨花】「……どういうつもり？」

【沙都子】「私は梨花を見習って、聖ルチア学園に相応しい過ごし方をしていただけですよ」

【梨花】「違うわよ。私が話し掛けても、手紙を置いても無視して。……最初は疲れて機嫌が悪いだけかと思っていたけど、あなたが露骨に私を避けているのを感じるわ」

【沙都子】「だって。梨花の取り巻きが、すごい形相で睨み付けてくるんですよ」

【梨花】「私があんたを睨みつけたことなんかあった？ それにすごい形相で睨み付けてくるのはあんたの取り巻きも同じだよ」

【沙都子】「梨花。……楽しいでしょう？ 取り巻きに囲まれて、ちやほやされる学園生活は」

【梨花】「あんたも楽しそうにしているわ」

【沙都子】「女王蜂が2匹いる巣はない。……どういふことかわかってごさいますか？」

【梨花】「……あんた、……私と張り合おうっていうの？」

【沙都子】「私を裏切った仕返しに、梨花の楽しい楽しい学園生活を、奪い取って差し上げますわ。あんたに競り勝ち、私が聖ルチア学園の頂点に立ちますの。梨花は蹴落とされ、日陰者のみじめさをたつぷりと味わったらいんですわ」

【梨花】「それが……、あんたの復讐の仕方なのね……」

【沙都子】「梨花。私が頂点を取ったら、私に従いなさいませ。裏切りの学園生活の分を、きっちり清算させてもらいますよ」

【梨花】「……………沙都子……………」

梨花も察せざるを得ない。

沙都子は本気だ。勝負を挑み、恨みを晴らすつもりでいる。

そして、卑怯ではない。

トラップを得意とする沙都子ならば、いくらでも不意打ちの術はあるのだ。

それをせずの、真正面からの宣戦布告。

受けて立たざるを得ないのだ。

どれほどにすれ違っしてしまおうとも、それでもまだ、互いは親友だと信じ合っているから。

【梨花】「いいわ。私が勝ったら、沙都子も私に従うのよ」

【沙都子】「無論ですわ。梨花の鞆持ちだろうと太鼓持ちだろうと、何だっしてあげましようよ」

【梨花】「勝負はどうつけるの？」

【沙都子】「天辺を争える行事は、学園生活にはいくらでもありましてよ」

様々な学園行事で天辺を競い合う。

目に見えるポイントが与えられる訳ではないが、勝敗によって学園の生徒たちの尊敬がそれぞれに集まるだろう。

そしてそれははずれ必ず、どちらが頂点に相応しいかを示してくれるのだ。

7月。一学期、期末テスト。

廊下に成績の順位が貼り出される。

1位、古手梨花。2位、北条沙都子。

【女生徒たち】「キヤーー!! 梨花さまが学年トップですわあ! やっぱ梨花さまこそがチーアの頂点ですわ! 北条さんとは比べるのも失礼ですわね!」

【女生徒たち】「ホント、さすがは古手さんですわ! 胸に行くはずの栄養まで頭に行ってるんだから、沙都子さまより1点余計に取れるのも仕方ありませんわねえ」

【女生徒たち】「きいいいい!! 梨花さまのお胸は純潔の証ですよ! 北条さんの胸は墮落の証なんですよ!!」

【梨花】「私に勝ちたいからってだけの理由で、よくもここまでお勉強が出来るものね」

【沙都子】「狙うのは1位のみ。圭一さんやレナさんを骨抜きにして勝ちを攫うしか能のなかった梨花と違って、私は1位を取る為ならどんな努力も出来ませよ?」

【梨花】「勝ったのは私だけと、あんたも2位。この程度じゃまだ、決定的な勝者にはなれていないわね」

【沙都子】「次は8月。夏休みの自由課題で勝負ですわ……ッ」

8月。夏休み。

宿題は片付けて当り前。優秀はない。

しかし、自由課題はそのセンスを問われ、学校からの表彰の対象にもなる。

金賞、北条沙都子。銀賞、古手梨花。

【女生徒たち】「キヤーー!! 沙都子さまの自由課題が学年トップですわあ! しかも世界中の夏祭りをテーマにここまで研究を深めるなんて、本当に素晴らしいですわー!!」

【女生徒たち】「祭りに乗じてハメを外す庶民の生態研究のどこが良いのかしら! 実に低俗! 梨花さまの、日本の伝承や怪談の研究の方がよっぽど高尚ですわ!」

【女生徒たち】「その高尚な研究が銀賞で、低俗な研究が金賞なんて、どんな気持ち? どんな気持ち? おーほほほほほ!」

【沙都子】「梨花のものもなかなかでしたけれど、過去の金賞の研究テーマを先に調べておけ

ばよかったですわねえ?」

【梨花】「……最後には審査員の好みが出たわね。でも、所詮は好みの問題よ。この程度で白黒がついたとは誰も思っていないわ」

【沙都子】「次は二学期の、中間テストで勝負ですわ!!」

【梨花】「ようやく二学期が始まったばかりだというのに、もう中間テストの話とは、私たちは実に気が早いわねっ」

9月。二学期、中間テスト。

1位、古手梨花。2位、北条沙都子。

【女生徒たち】「キヤーー!! 梨花さまが学年トップですわあ! やっぱり学園のトップとは成績のトップのことですわよねえ! 北条さんはその器ではありませんでしてよー!!」

【女生徒たち】「沙都子さまは、ご自分の勉強だけでなく、私たちの勉強も見て下さったのよ! 私たちの平均点なら、あんたたちツルベタ絶壁軍団には負けないんだから!!」

【女生徒たち】「おーほほほほ!! 胸以外に言い返せる要素はないのかしらあ?! 豊乳なんて自称ちよいポチャの夏太りたちの戯言に過ぎませんでしてよー!!」

【梨花】「聞いたわよ。額に冷え冷えシートを貼って、栄養剤がぶ飲みしながらテスト勉強してたって。もう少しエレガントには出来ないのかしら？」

【沙都子】「悔しいですけど、梨花が涼しげにやっつてのけることを、私は熱血で頑張らないと追いつけないんですの。でも、逆のこともあるんではございませんこと？」

【梨花】「次は10月。……体育祭ね」

【沙都子】「私、梨花には身体能力で劣った試しは、昔からただの一度もありませんのよ？」

10月。体育祭。

沙都子と梨花が直接対決することになる種目はなかった。

なぜなら、実力差が近い者同士の組み合わせで競うようにし、大負けして自信喪失する生徒を出さない為という配慮があるからだ。

沙都子は、自分と運動能力の近い、学園トップクラスの生徒たちと勝負して見事に1位に輝く。

チアリーダーिंगでも抜群のカリスマを発揮し、体育祭のクイーンの座を誰もが認める形で獲得した。

【女生徒たち】「キャー!! やっぱり沙都子お姉さまこそ、ルチアの頂点! ルチアの花ですわあ!! 古手さんなんて、所詮は病弱っ子のヒョロガリ系に過ぎませんでしてよー!!」



【女生徒たち】「あーいるいる、いますわよねー!! 成績ではぼつとしないのに、運動会でだけ輝いちゃう、線香花火みたいな子って! 学校は勉強の場ですよ? 体育祭で輝いても価値は大してありませんわー!!」

【女生徒たち】「ほーっほっほっほ! 学校がお勉強の場だけだと思っているところが、古手さんの取り巻きらしい、浅はかで根暗なところですよわねー!!」

【沙都子】「まあ、これは私が勝って当然ですよわ。梨花は無駄に張り合わず、余力を温存したってところですよわね?」

【梨花】「まあね。こればかりは沙都子に太刀打ちは難しい。次は10月の文化祭の勝負。これを落として、連敗することだけは避けなくちゃならないわ」

【沙都子】「文化祭は陽キャの祭り! 悪いですけれど、ここはサクリと連勝をさせてもらいましてよー!!」

【梨花】「侮らないことね。根暗な陰キャの私にも、輝けるチャンスはあるんだから」

11月。文化祭。

沙都子たちは仲間と一緒に、元気いっぱいな催しをいくつも開催し、大いに盛り上げた。だが、年頃の女子高生たるもの、ただ明るくて楽しいだけでは一味足りないのだ。

梨花とその仲間たちの催しである、体験型ウォークスルーお化け屋敷「血塗られた聖ルチア学園」は大人気!

普段、お上品にしている女生徒たちも、たまには存分にお下品に悲鳴をあげてみたいのだ。

【女生徒たち】「キャー!! 怖すぎる!! 怖すぎますわ、梨花お姉さまあ!! 今夜はひとりでおトイレに行けなくなってしまうそうですのよー!!」

【女生徒たち】「でもさすがは沙都子お姉さまですよ! あの恐怖のお化け屋敷を、鼻歌混じりで突破してしまうなんて!」

【女生徒たち】「でも、催しとしては梨花お姉さまの圧勝ですよわね!! やっぱり乙女は、神秘とオカルトを尊ぶのですわー!!」

【梨花】「これで立場は逆転ね? 次は12月、期末テスト。ここまでテストでは全て私に敗北している沙都子に勝算はあるのかしら? 容赦なく2連勝をいただくわよ」

【沙都子】「……まさか、お化け屋敷なんてお下品なものガルチアで通用するとは思いませんですよ……。ですが、心配はご無用ですよわ! 一度も成績で勝ったことはないけれど、それでも常にびつたりと2位に付けてきたのですもの!」

【梨花】「なら今回もまた、2位に甘んじればいいんだわ。私もあなたが2位を取れるよう、応援してあげるわ。くすくす」

【沙都子】「ああら素敵な陰湿笑顔！ 梨花の取り巻きたちにも見せてあげたいくらいにお上品ですわあ!!」

12月。二期、期末テスト。

結果はまさかの、沙都子が学年トップ!

不眠不休でテスト勉強し、目の下にクマを作りながらヨロヨロになっている沙都子。

【沙都子】「……梨花……。手を抜きましたわね……」

【梨花】「たとえトップを取れても、その情けない様では、ルチアには相応しくないわね。くすくす」

【沙都子】「2位のくせにエレガントで……。まるで私の方が敗者みたいですよ……」

1月。マラソン大会。

梨花も十分な体力作りの上で臨み、終盤までは好順位をキープした。

ところが無理が祟ったのか体調を崩し、ついにはへたり込んでしまったのだ。

それに気付いた沙都子は、トップ争いを捨てて梨花の元へ駆け寄り、肩を貸したのだ。

それを見て、沙都子派の女生徒たちは感動の声援を送り、梨花派の女生徒たちは敵に情け

をかけられたと悔しがる。

その一方で、肩を組んで走る二人の姿に、新たな境地を開眼させて、百合色の声援を送ってしまう女生徒たちも現れていた。

【梨花】「……たとえあなたに勝てなくても、……私の努力の成果に、みんなが感動して、あなたより目立てるって作戦だったのにな」

【沙都子】「そんなの読めていましたよ？ こうして肩を貸すだけで、私がポイントを横から攫える訳ですわ」

【梨花】「私とあなたの取り巻きが、ギャーギャー言い合ってるのはいつものことだけど、……私たちが肩を組んで走ることに、妙に黄色い声援を浴びせる連中がいるのだけれど、どういうことかしら」

その後も様々なテストや行事で、二人は優劣を競い合う。

最初の頃こそ、それを見ている女生徒たちは、勝敗の行方だけに関心を持っていたが。

次第に、互いが互いの姿だけを瞳に映し合っって切磋琢磨している様子に、別の感情が芽生え始める……。

【取り巻きたち】「……いつか……お姉さまの瞳に映ることを独り占めしたいと思っ
てきま
し
たけれど……。とても勝てそうにありませんわ……」
【取り巻きたち】「ううう……。梨花さまになら……。沙都子お姉さまを奪われても受け入れら
れるわ……」

【取り巻きたち】「むしろ、沙都子さまと梨花さましか勝たん……」

【取り巻きたち】「それでも私は！ 梨花お姉さまを応援しますわ！ あのお二人の崇高な勝
負が続く限り!!」

【取り巻きたち】「沙都子お姉さま！ あなたの梨花さまへの意地は、もう愛なんですわ!!
絡まり合う2輪の百合。私たちが見守りましてよッ!!」

そして天王山となる生徒会長選挙では、2人はまったくの同票数を獲得。
前代未聞のダブル生徒会長の誕生となった。

沙都子と梨花は、またしても決着をつけ損ねたと悪態をつき合ったが、それも含めて楽し
んでいるように思えた。

そんな日々の中で、梨花が一度だけ沙都子に尋ねたことがある……。

【梨花】「ねえ、沙都子。あなたも、そして私も、もう十分に学園生活を楽しんでいるように
思えるわ」

【沙都子】「そうですわね。まあまあ、悪くない学園生活ですよ」

【梨花】「それでも、決着をつけるの？ ……いえ、……つけますのですか？」

【沙都子】「……んー……」

沙都子は、遠くを見ながら微かに笑う。

もう、恨みとか復讐とか裏切りとか、そういうのはどうでもよくなりつつあることは、薄々
感じ始めている。

【沙都子】「でも、ごめんなさいですわ。……私、どうしても梨花に勝って、梨花とやりたい
ことがあるんですもの」

【梨花】「話によっては、勝ち負けに関係なく協力してもいいわよ……?」

【沙都子】「ううん。話さない。私が梨花に勝って、梨花が負けたことを受け容れてくれた時
にしか、話せないし、梨花も聞けないと思うし」

【梨花】「そう。……じゃあせいぜい、悔いがないように決着をつけないとね」

【沙都子】「梨花は、勝ったら私にやらせたいことであるのかしら?」

【梨花】「私は簡単よ。あんたと一緒に雛見沢に帰る。あの家は潰れちゃったそうだから、新
しい住処を探さないとね」

【沙都子】「……………ありがと。それが梨花の望みなら、私も安心して負けられるかもしれませ
んわね。……………でも、それだけでは駄目ですよ」

【梨花】「……………何が望みなのですか？」

【沙都子】「勝てたら言うし、梨花も負けなくちゃ、とても受け入れられないと思うから。だ
から内緒ですわ！」

【梨花】「よくわからないけれど、最後まで勝負は続けなくちゃならないよね」

【沙都子】「梨花。あなたの裏切りへの怒りは、私、まだ癒えてはいませんか？ 梨花に負
わされた傷の分だけ、私は取り戻さないとはいけませんよ」

【梨花】「そんな爽やかな顔で、恐ろしいことを言われるとかえって怖いのですよ、にば☆
【沙都子】「くす、ふふふふふふ」

そして月日は流れ。

ついに二人は卒業の日を迎える。

この卒業式で、ついに決着がつくのだ。

卒業生の中で、もつとも優れた1人に贈る栄誉。最優秀生徒賞。

伝え聞いた噂では、教員たちの間でも二人のどちらに与えるかでずいぶんと揉めたらし
い。

生徒会長も二人でやったのだから、最優秀生徒賞も史上初の二人同時受賞で良いのではな
いかともなつたらしい。

しかし、最優秀生徒に与える副賞である「金の時計」は、1つしか用意されない。もう1
つを用意することは、予算上の都合からも難しい。

ならば、金の時計を二つに割って与えるのはどうかということになり、この苦肉の策で行
こうと一度は決まつたらしい。

だが、最終的な理事長の決裁時に、割れた時計は時を刻まないと言われて却下。
沙都子か梨花の、どちらか片方にしか与えられないこととなる……………。

このニュースは、神聖な仲である二人を応援する女生徒たちを大いに落胆させた。

もはや、二人の競い合いは、それ自身が尊いのであって、勝敗を決めることは野暮とさえ
思えたからだ。

入学時から卒業時まで、ずっと品行方正で非の打ちどころのなかった、まさに聖ルチア
学園を代表するに相応しい古手梨花か。

それとも、補習クラスや自習室にまで落ちた元不良が、猛烈な努力で頂点を争うまになつ
た前代未聞の努力を讃えての、北条沙都子か。

シミひとつない乙女こそが、聖ルチーアの模範。
しかし、地の底から根を伸ばし、芽吹き、立派に成長した花の美しさもまた、聖ルチーアの模範。

厳肅な卒業式の最中、卒業生たちも在校生たちも、金時計はどちらに贈られるのかと囁き合っていた……。

しかし梨花は、……密かに敗北を覚悟していた。

シミひとつない乙女が、シミひとつないままに卒業を迎えることなど、多少の節制の結果ではない。

しかし沙都子は違う。

私に連れられて、興味もない学校に入って、不貞腐れて落ちぶれて。

なのにそこから、私と共に切磋琢磨する雛見沢の頃のような関係になる為に、あれだけの努力を見せたのだ。

だから、……これは当然なのだ。

おめでとう、沙都子。……にばー☆

沙都子は壇上に上がり、金時計を受け取る。

勝者に相応しい堂々とした笑顔を、一同は大喝采で讃えた。

でも、梨花にだけはわかる。

それは、ルチーアに入学して以来、初めて沙都子が見せた、心からの笑顔だった……。

卒業式の後、余韻を楽しんだり、あるいは在校生たちに挨拶がしたくて校舎に戻る卒業生たちもいる。

沙都子と梨花もそうしていた。

そこは、はじまりの場所。

クラスは同じであれ、宿舎は違った。せめて梨花がルームメイトだったなら……、そう思っ
て背中を何度も見送った、はじまりの場所。

今ではもう、二人が並んで歩くことに誰も異論は挟まない。

むしろ、二人の間に割って入る資格など誰にもないと、誰もが知っている。

二人の仲を神々しく思っている取り巻きたちが、少し距離を開いて、ぞろぞろと付いてくる。

【沙都子】「……初めは、梨花にひとりぼっちの辛さを味わわせて始めて始めたことだったけれど。今となってはどうでもいいことですね。今日の勝利の前にはね」

【梨花】「沙都子と張り合うことになるとは思わなかったけれど。……多分、あんたのお陰で、私は悔いのない最高のルチーアの学園生活を送ることが出来たわ。……ありがとう」

【沙都子】「梨花をどん底に落として復讐するつもりだった私にとっては、お礼を言われた時点で、復讐は失敗ですね」

そう言って、沙都子は涼しげに笑った。
わかってる。

梨花には、その笑みが、99点で、1点だけ足りないのがわかってる。

【梨花】「勝負は沙都子の勝ち。私はあなたに従う約束だわ。……私に勝たなきゃ話すことも出来ないことって、一体、何？」

【沙都子】「梨花はこの学園で、最高の学園生活を送れた。そう仰いましたわよね。……なら、今度は私に、最高の高校生活を送らせてもらう権利があるんではありませんか？」

【梨花】「……え？ ……ああ、……くすくす……」

沙都子が何を言おうとしているのか、梨花はすぐに察する。

【梨花】「誰にとっても、青春時代は一度だけ。もちろん、高校生活も一度だけ」

【沙都子】「ただしそれは、私と梨花以外にとっては、ですね」

【梨花】「あんたは……、それだけの為に、大嫌いなルチーアで、あれだけの勉強を頑張っ、あれだけの努力を積み重ねたというの？」

【沙都子】「ええ。……梨花が私とルチーアに行きたいと言って、本当は大嫌いだっただお勉強を頑張った程度には、でございましてよ」

【梨花】「いいわ。……いいえ、いいですよ、沙都子。今度はボクが付き合う番なのです」

【沙都子】「ありがとうですね、梨花……」

黄色い歓声とも悲鳴ともつかないものが湧き上がる。

沙都子と梨花が、互いに抱き締めあったから。

そして鼻を重ね合いながら、くすくすと笑い合っているのだ。

【梨花】「沙都子。人目が恥ずかしいですよ」

【沙都子】「ですわね。二人きりになれるところへ参りましたよですわ」

すると沙都子は、挨拶に応えるかのように軽く右手を挙げる。

【沙都子】「皆様、ごめんあそばせ。見世物ではありませんのよ。それでは失礼いたしますわ」

【梨花】「さよなら、ルチーア。ボクたちはとっても楽しかったのですよ、にば☆」

二人は一層硬く抱き締め合う。

沙都子は梨花に、全ての努力を捧げた。

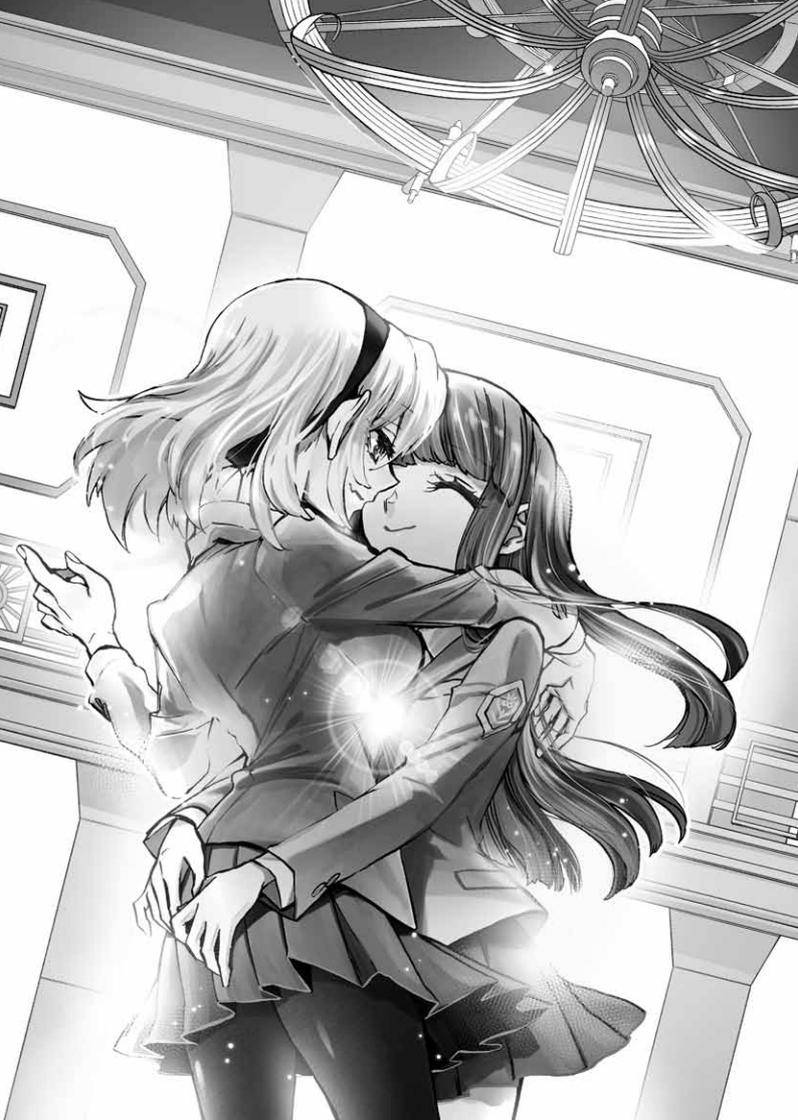
梨花は敗北し、今度は沙都子に全てを捧げた。

宇宙はひとりでは生み出せない。

ふたりのひとつの想いだけが、宇宙を生み出すのだ。

無数の星々の煌めきが、天より降り注いで二人を祝福する。

ふたりに生み出す、ひとつの宇宙。



だから祝福の王冠は、ひとつだけで十分だ。

ふたりは、包み込むような王冠を見上げて微笑み合う。

【梨花】「それではご機嫌よう、皆様方」

【沙都子】「気が向いたらまた、何かのなく頃に」

ふたりは祝福され、ふたりの宇宙は完成した……。



熱い夏。

容赦のない蝉の声。

真っ青な空と青々とした山々の美しきの、難見沢。

2台の自転車、興宮へ続く長い下り坂を颯爽と走り抜けていく。

沙都子。今日は一緒にいきたいところがあるのです。

梨花にそう言われて誘われた沙都子は、二人で興宮に向かうところだった。

興宮の町は懐かしい思い出いっぱいだ。

関わればいつもただ事では済まない、エンジェルモートやおもちゃ屋さん。

あそこもこれも、百億の思い出がまつてる。

角を曲がると書店が見えて来た。

限られたお金で漫画や雑誌を買ったり、あるいは様々なジャンルのコーナーをぶらりと歩いて、表紙を眺めたりするのも楽しかった。

そして、梨花が自分の夢を打ち明けてくれた場所でもある……。

しかし、二人の自転車はそこを通り過ぎる。

どんだん、通り過ぎる。

どんだん、どんだん。

今日はなんて爽やかなお天気。

ただ風を切って、二人どこまでも自転車を走らせるだけで、こんなにも気分がいいなんて。

バスの停留所を越えた辺りで、ようやく先頭の梨花はペースを落とした。

【沙都子】「梨花あ、ここはどこですか？」

【梨花】「みい！ 今日偵察に来たのですよ」

【沙都子】「何を偵察するんですごいまして？」

【梨花】「ボクと沙都子が、楽しく過ごせるかどうかを、偵察なのです。にはー☆」

少しだけ燥けているけれど、大勢の人間の人生を見守ってきたバス停には、こう記されていた。

興宮高校前。

〈おしま〜〉



< 奥付 >

発行日 2022年10月15日

発行 07th Expansion

印刷 プリント・オン

表紙イラスト 夏海ケイ

編集 れもたろ

連絡先 bbs@07th-expansion.net

(以上、敬称略)



